

今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会（第7回）

令和6年5月28日(火)15:30-17:30

幼児教育におけるプロセスの質向上に向けて



平成29-令和4年度プロジェクト研究

「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究〈報告書・第2巻〉
幼児教育におけるプロセスの質に関する研究」より



国立教育政策研究所 幼児教育研究センター

副センター長・総括研究官 掘越 紀香

幼児教育・保育の質評価への関心の高まり: 海外の質評価スケール例

1. ECERS (Early Childhood Environment Rating Scale)

Harmsらによって米国で開発された、3歳以上の集団保育の質を測定する尺度。

1980年の初版発行以後、1998年と2015年に大きな改訂があり、ECERS-3は2015年版。

保育環境評価スケールとして、米国や英語圏の国々のみならず各国で翻訳されている。

2. SSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being)

Sirajらによって2015年に英国で刊行された、2歳から5歳の保育の質を測定する尺度。

特徴は、プロセスの質のうち特に保育者と子供の関わりに焦点を当てている。2024年に第2版が出ている。

3. CLASS (クラスルーム評価システム Classroom Assessment Scoring System)

Piantaらによって2008年に米国で刊行された尺度。保育者・教員と子供とのやりとりに焦点化し、

プレスクールPre-K対象、キンダーガーテンから初等学校3年K-3対象等、乳幼児から児童、中学生までの

クラスの教育活動の質について評価可能な尺度。「情緒的サポート」「クラスの構成」「教育的サポート」

の3領域から評定。就学レディネスとして学習重視の傾向。2023年にPre-K-3rdの第2版が出ている。

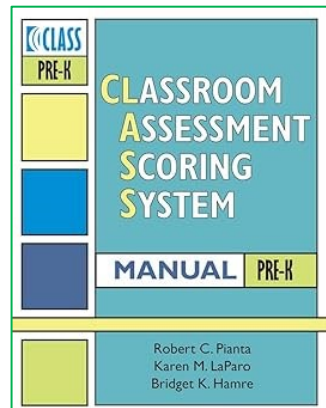
● 上の2つは邦訳あり。他にも海外では様々な「質評価スケール」が開発されており、

日本でも自己評価チェックリストや日本版SICS等、質評価ツールの開発が行われている。

● 質評価スケールの活用には意義が認められる一方、慎重な検討が必要。

幼児教育・保育の質評価は、社会文化的背景や制度・政策等の影響を受け、複雑で多層的多面的。

日本の幼児教育・保育の文脈を踏まえた質評価スケールの検討・作成に取り組んだ。



幼児教育における保育実践の質評価スケール案：主体的な関わり、社会情緒的な育ちと学びの芽生えに着目して（以下「質評価スケール案」と記載）

1. 目的

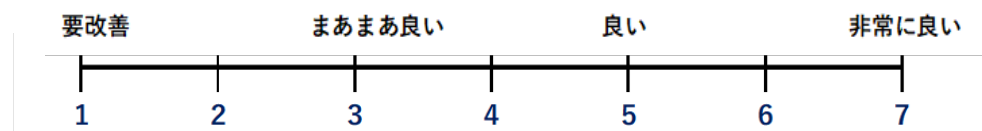
本研究では、ECERS-3やECERS-E、特にSSTEWの**保育プロセスの質に関する項目や指標**を部分的に取り入れつつ、**要領・指針の内容**を参考に、**日本の幼児教育・保育の文脈に沿った質評価スケールの作成**を目指す。なお、**研究目的で利用可能な質評価スケール**も目指すが、保育現場で活用する場合、評価・評定のみが目的ではなく、**研修等の場で保育実践を捉えたり振り返ったりするための観点の一つとして提示し、項目をきっかけとして保育実践について語り合い、保育実践の改善や向上に活用**していくことを目指す。

2. 方法

10園21クラス（幼稚園、保育所、認定こども園）で**試行の質評価スケール調査（ECERS-3とSSTEWとの同時実施）**を行い、**保育者や園の管理職14名へのヒアリング**も踏まえ、プロジェクト委員のWGメンバーが質評価スケール案を検討・作成した。

3. 観察と評定

「質評価スケール案」（9項目112指標）は、**3～5歳児の一つの対象クラス（グループ）**での保育実践が対象、子供が行き来できる**室内・戸外の全ての場所**で、**研修を受けた評定者が複数**で、**約3～4時間の保育観察と保育者インタビュー**を通して**7段階評定**する。



幼児教育における保育実践の質評価スケール案：主体的な関わり、社会情緒的な育ちと学びの芽生えに着目して（以下「質評価スケール案」と記載）

4. 質評価スケール案の項目・指標の特徴

「プロセスの質」を重視したスケール。項目Ⅶ、項目Ⅷ、項目Ⅸに高度な内容もあるが、新たな観点や目指したい観点を提示。日本の幼児教育・保育の文脈に沿って、「子供の主体的な関わり」「社会情緒的な育ち」「学びの芽生え」等に着目。日本での評定で課題とされる「言語」「数量図形、科学」「思考、探究」に重きを置いた内容。要領・指針の五領域や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえているが、領域「健康」「表現」等の全てのねらいや内容は網羅できていない。

5. 試行の質評価スケール調査の結果と考察

- 質評価スケール案、ECERS-3、SSTEWの結果は全体的に類似した結果。養護や応答的なやりとり、社会情緒的な援助は高い傾向、言語や文字、活動、思考・探究や課題解決に関わる援助は低い傾向。質評価スケール案（5園5クラス）、他の質評価スケール（10園21クラス）の結果から、日本の幼児教育・保育の強みや今後の改善の方向性を、ある程度提示。
- 質評価スケール案は、総合評定が低めな場合（1：要改善～3：まあまあ良い）、他の質評価スケールより厳しめな傾向。日本で高く評定される傾向の「Ⅱ 社会情緒的な育ちを促す援助」指標を高度化した結果、総合評定が厳しくなった可能性。その影響について検討が必要。
- 協同性に関する項目「Ⅸ 協同や課題解決に向かうプロセスへの援助」を新規に加えた結果、5歳児の調査結果はポジティブに反映。3、4歳児でどのように評定すればよいか検討が必要。

質評価スケール案（9項目112指標）

I 健康と安全への配慮と指導：

子供の健康、衛生、安全のため、保育者が配慮し指導している内容

II 社会情緒的な育ちを促す援助：

応答的に関わり、子供の社会情緒的な育ちを促している内容

III 主体的な遊びや活動の援助：

子供が主体的に遊び、活動するように促し支えている内容

IV 好奇心を育む環境構成：

子供の興味・関心を促し、好奇心を高めるような環境を構成する内容

V 人とのコミュニケーションや言葉の援助：

子供が人とやりとりして、自分の考えを伝え、話し合い、言葉を使用するように促している内容

VI 言語的な表現の援助：

絵本・物語・歌・言葉遊び等の遊びや活動を通して、子供の言語的な表現を育み促している内容

VII 数量・図形や科学への興味・関心、感覚の援助：

子供の身近な自然や数量・図形、科学への興味・関心や感覚、考え方を育み促している内容

VIII 思考し探究するプロセスの援助：

子供が考えながら作ったり調べたりして、探究しようとすることを支え広げていく内容

IX 協同や課題解決に向かうプロセスの援助：

子供たちが協同して取り組み、課題を解決しようとすることを支えていく内容

質評価スケール案（例）

→第2巻PP.131-132.

項目Ⅰ 健康と安全への配慮と指導

子供の健康、衛生、安全のため、保育者が配慮し指導している内容

Y N 第1項 幼児教育における保育実践の質評価スケール案

- 3-1 安全で衛生的な園環境となっている。（設備・備品の安全点検、避難訓練の実施、感染症対応、アレルギー対応等）★*¹
- 3-2 室内や戸外で、子供の安全を守るための見守りが、基本的に行われている。
- 3-3 保育者は、子供が健康で衛生的な行動をとるように促し、必要に応じて声をかけて援助する。
- 3-4 戸外や室内に身体を動かして遊ぶ場所があり、全体的に安全である。
- 5-1 全職員で、安全対策や衛生管理、事故・災害発生時の対応について学んで共通理解している。★
- 5-2 家庭や地域の関係機関と連携して、安全指導や避難訓練等を行う体制を整えている。★
- 5-3 適切な温度・湿度・換気・採光・音等の環境を保ち、状況に応じて配慮している。
- 5-4 保育者は、子供に健康や安全のためのきまりと理由を、年齢に応じて説明している。様々な危険等を想定して、健康や安全に配慮している。
- 5-5 戸外や室内で活動する際、安全に必要な設備が整っており、数種類の遊具・用具・教材*²・素材が必要な数や量*³用意されている。
- 7-1 保育者は、健康や、安全、衛生に関わる行動について、絵や言葉で掲示したり、話題に取り上げたり、みんなで話し合ったりする等して、子供たちが自分で確認したり、適切な行動をとったりできるようにしている。★
- 7-2 保育者は、子供自らが健康や衛生に関心をもち、進んで生活の場を整えるように援助や環境構成をしている。
- 7-3 子供が自ら危ないことに気付き、自分で考えながら安全に遊べるように、保育者は援助したり環境を整えたりしている。★

第2項 幼児教育における保育実践の質評価スケール案の項目解説案

「項目Ⅰ 健康と安全への配慮と指導」では、子供の健康、衛生、安全のため、保育者が指導し配慮している内容に着目した項目と指標について解説する。

【概要】 子供が園生活の中で、自己を発揮して友達や保育者と豊かに育ち学ぶためには、心身の健康や衛生、安全が前提となる。保育者は、基本的に健康や衛生、安全に関わる環境を日々整えて管理することが大切である。子供は発育・発達に応じて、保育者の援助や指導のもと、自分の健康と安全に関わる行動や危険に対する注意力を身に付けていく。

【評価の観点】 この項目では、一人一人の子供の健康や衛生、安全、情緒の安定等に関わる保育者の実践上の配慮の在り方、例えば、室内や戸外の環境作り、点検や訓練、状況に応じた対応や見守り等に焦点を当てる。また、健康と安全に関わる子供の気付きを認めて意欲を高めたり、その行動を促したりする等の指導にも着目する。

3-1 安全で衛生的な園環境となっている。（設備・備品の安全点検、避難訓練の実施、感染症対応、アレルギー対応等）★

安全で衛生的な環境としては、施設設備や備品、遊具等の安全点検や整備がなされており、地域や園、クラス等の実情に応じて、換気、消毒、手洗い・うがいの場や備品の整備がなされていることを確認する。また、緊急時に備えて、連絡先一覧の作成と掲示、持ち出し品の点検、複数の避難経路の確保、避難訓練の年間計画の作成と実施等がなされていることも重要である。さらには、感染症への予防対策をするとともに発生時には迅速に対応したり、アレルギーを持つ子供の対応を検討したりしている。

3-2 室内や戸外で、子供の安全を守るための見守りが、基本的に行われている。

保育者は、子供の室内や戸外の活動の特徴や動線を踏まえ、安全を確保している。様々な場所で遊ぶ一人一人の子供の安全を守るために、それぞれの居場所を把握しようと努め、見守っている。また、戸外での活動時には、天候が変化したときの対応や熱中症等への注意を行っている。そのほか、交通事故や不測の事態に対して、日頃から具体的な対策を立てている。

Ⅳ 好奇心を育む環境構成：

子供の興味・関心を促し、好奇心を高めるような環境を構成する内容

【概要】 遊びや生活を通して、子供は身近な環境と出会い、ものや人への興味・関心が芽生える。興味を持った環境（素材や教材、遊具等）に対し、子供は主体的に関わり、様々な関わり方を試したり工夫したりすることを通して、興味・関心を深め、探究するようになる。保育者は、一人一人の子供の発達や興味・関心によって、環境との関わりが異なることを踏まえつつ、子供の好奇心を育み、興味・関心を広げ深めるような環境を構成することが大切である。

【評価の観点】 この項目では、子供が様々な環境と出会い、興味・関心を持って関わるように、保育者が工夫して環境構成や再構成をしているか、子供と一緒に環境を整えたり創ったりしているか、子供なりのやり方や工夫を認め、好奇心や探究心を高めるような環境や援助になっているか等に焦点を当てる。

IV 好奇心を育む環境構成：


子供の興味・関心を促し、好奇心を高めるような環境を構成する内容

3-4 保育者は、遊びや活動の場を用意するとき、子供が興味・関心を持てるように素材や教材等を一緒に準備している。

子供は、興味・関心に基づいて**遊びや活動を選択**しているが、**保育者と一緒に取り組む**ことにより、**更に興味・関心を持つ**ようになる。保育者は、遊びや活動を始める際やその最中に、**新たな素材や道具、遊具を一緒に準備**したり、**関わり方や新たな遊び方を提案**したりしている。例えば、子供と一緒にテーブルをテラスへ運んだり、色水作りに使うための草花を摘みに行ったり、すり鉢・すりこぎやボウル、ペットボトル等をそろえたりすることで、**子供がその遊びや活動に興味を持つきっかけ**となっている。

質評価スケール案の課題

- 1. 指標の文言の改善や簡略化** 各指標の文章が長く、1項目の指標数も多い。指標の文言の改善や簡略化の検討。
- 2. 事例等での解説** 項目や指標をより理解するため、具体的な事例等での解説が必要。
- 3. 領域「健康」や「表現」等に関する項目・指標の検討** 領域「健康」「表現」等に関する項目・指標の検討。
- 4. 評定判断の差の検討** 評定3、5、7の評定判断の違いを検証。評定3は観察されたらYES、評定5は複数挙げた例が幾つか観察されたらYES、評定7は複数挙げた例全てが観察されたらYES。評定3は比較的容易に該当する内容の指標となるよう検討。
- 5. 発達や時期に応じた保育実践の質評価の難しさ** 高度な活動内容に関わる項目Ⅶ、項目Ⅷ、項目Ⅸは、年齢や時期により評定5や7の指標が難しい場合がある。年齢が上がり、別の活動に発展し観察されなくなる場合もある。評定での検討や評定者間の共通理解が必要。基本は3歳児なり、4歳児なり、5歳児なりの姿と援助を想定、インタビュー等で確認。
- 6. 保育者インタビュー内容の精選** インタビューで確認する指標が多く、評定者協議で、内容の吟味・精選。
- 7. 妥当性の検証** 質評価スケール案での調査数が少なく、多様な園で実施し調査数を増やし、信頼性・妥当性を検証。

 日本の幼児教育・保育の文化や文脈に沿って、海外の質評価スケール等の指標や評価方法と共存し、選択肢の一つとして、研究や研修等で活用されるよう、今後も更なる検討と改善を重ねたい。

質評価スケール案実施上の課題

1. 自由に遊ぶ時間のある日程で観察 行事前後等で自由に遊ぶ時間がない日は避ける。

2. 質評価スケール案評点の慎重な取扱い 数値化は、分かりやすさとともにリスクがある。評定に至る様々な背景（観察事例の照合、根拠事例の読みとり、協議での意見、保育観察とインタビューとの比較等）が抜け落ち、保育実践の良さや課題の改善に向けた観点の提示等が難しくなる。また、評点を利用した安易な序列化は望ましくない。質評価スケール案実施では、基本的に評点を伝えず、当日の実践で良かった点、課題を改善する方向性（明日から実践できるような内容）等を伝える。

3. 複数での共同観察や協議、保育者とのインタビュー、フィードバックの推奨 限られた時間で観察事例を、脱文脈化した指標と対応させて評定するため、当日の様々な子供の姿や保育者の関わり等を十分には拾えない。複数での共同観察により、多視点からの意見や読みとりを協議し評定できる。保育者インタビューや意見交換を通して、観察以前の子供の様子や遊びの展開、環境構成、援助の意図等を確認し、評定結果の信頼性・妥当性を高める。感想メモを事後に渡す等のフィードバックを行う。

4. 質評価スケール案の評定者研修の検討 質評価スケール案の項目や指標を理解し、観察・評定するための研修が必要。例えば、幼児教育アドバイザー、ミドルリーダー、養成校教員等を対象とした質評価スケール案の評定実習研修、質評価スケール案を活用した園内研修実施のための研修、研究目的の評定者養成研修等。今後は研修講師の確保や、評定者を養成する研修プログラムの検討・実施システム、園内研修の実施方法の検討等が必要。

(参考) 幼児期からの育ち・学びを捉える

3歳児から7歳児までの縦断研究から



平成29-令和4年度プロジェクト研究

「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究〈報告書・第1巻〉
幼児期からの育ち・学びに関する研究」より



※以下、荒牧(2023)「成果報告第1部・幼児期からの育ち・学びに関する研究」
国立教育政策研究所・令和5年度教育研究公開シンポジウム資料より一部引用・加筆

問題

■海外の主な縦断研究 幼児教育・保育や非認知的スキル(社会情緒的スキル)へ注目

- ・米国のペリー就学前プロジェクト(Heckmanら, 2006)
- ・米国NICHDのSECCYD調査(NICHD ECCRN, 2005)
- ・英国のEPPEプロジェクト(Sylvaら, 2012)

幼児期の非認知的スキル(社会情緒的スキル) →生涯にわたって影響

幼児教育・保育の質 →その後の育ち・学びへ影響

→特に社会経済的困難な家庭の子供に効果

■日本の縦断研究 →幼児教育に関する大規模縦断調査(文部科学省委託・CEDEP)

- ・ベネッセ教育総合研究所(2023)「幼児期から中学生の家庭教育調査縦断調査」ダイジェスト版
- ・発達保育実践政策学センターCedep・ベネッセ教育総合研究所(2023)
- 「乳幼児の生活と育ちに関する調査2017-2022・0歳~5歳」ダイジェスト版・データ集
- ・厚生労働省・文部科学省「21世紀出生児縦断調査」二次分析(山口, 2019)

2歳半3歳半データ:保育所通所が子供の言語発達等を改善、母親学歴が高卒未満の場合、子供の多動性傾向と攻撃性傾向を引き下げ。保育所通所は、母親のしつけの質や精神状態にも効果的、特に母親学歴が高卒未満で大きくなる可能性。

目的

- 幼稚園、保育所、認定こども園、小学校の3歳児から7歳児（小学校2年生）までの育ちと学びに関して、同じ幼児・児童について縦断的に調査し、社会情緒的スキル、認知的スキル、生活スキル（生活習慣）の関連や影響、他の要因（保育実践の質、教師と子供たちとの関係、子供の園や学校への適応感、保護者の養育態度等）との関連について検討する。

調査方法

手続き

3歳児から7歳児までの5時点で、縦断的な質問紙調査を実施
調査票は調査協力園・学校へ送付、配布・回収

回答者

① 担任保育者・教師 ② 保護者 (③ 園・学校の管理職)

対象児

【3歳児調査】対象児2,458名、管理職96名、担任保育者221名

【4歳児調査】対象児3,317名、管理職105名、担任保育者248名

【5歳児調査】対象児3,377名、管理職101名、担任保育者239名

【6歳児調査】対象児3,176名、管理職400名、担任教師781名

【7歳児調査】対象児3,117名、管理職400名、担任教師790名

3~5歳児完答データ:保護者1288件、保育者1641件

6、7歳児完答データ:保護者1684件、教師2142件

協力園・学校

全国の国公立の幼稚園、保育所、認定こども園と就学先の国公立小学校

3歳児調査87園、4歳児調査97園、5歳児調査92園、6歳児調査400校、7歳児調査400校

倫理的配慮

調査方法やデータの取扱いに細心の注意を払った

平成29年・令和2年に国研倫理審査で承認

調査概要（保育者・教師調査）

保育者

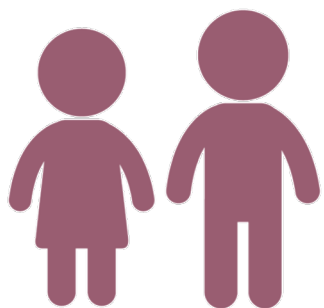


教師



- 生活スキル（生活習慣）
- 社会情緒的スキル
- 認知的スキル（読み書き・数、国語、算数 等）
- 保育実践の質【保育者】
- 教師と子供たちとの関係【小学校教師】

3歳児

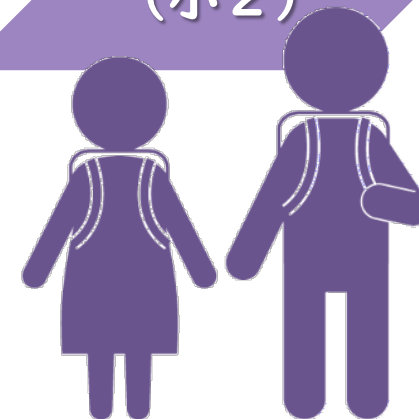


4歳児

5歳児

6歳児
(小1)

7歳児
(小2)



社会情緒的スキル

好奇心

- 身近なものの特性に気づいて生かしたり、物事の法則性、規則性を見つけ出したりする
- 新しいことに興味を持って「不思議だな」「なぜだろう」と考えたり調べたりする 等

粘り強さ

- いろいろなことに対して、自信を持って取り組める
- すぐにはうまくいかないことでも、粘り強く取り組んでがんばることができる 等

協同性

- みんなで何かをやり遂げようとするとき、積極的に話し合いに参加する
- 共通の目的に向かって役割を分担し、みんなと一緒にやり遂げようとする 等

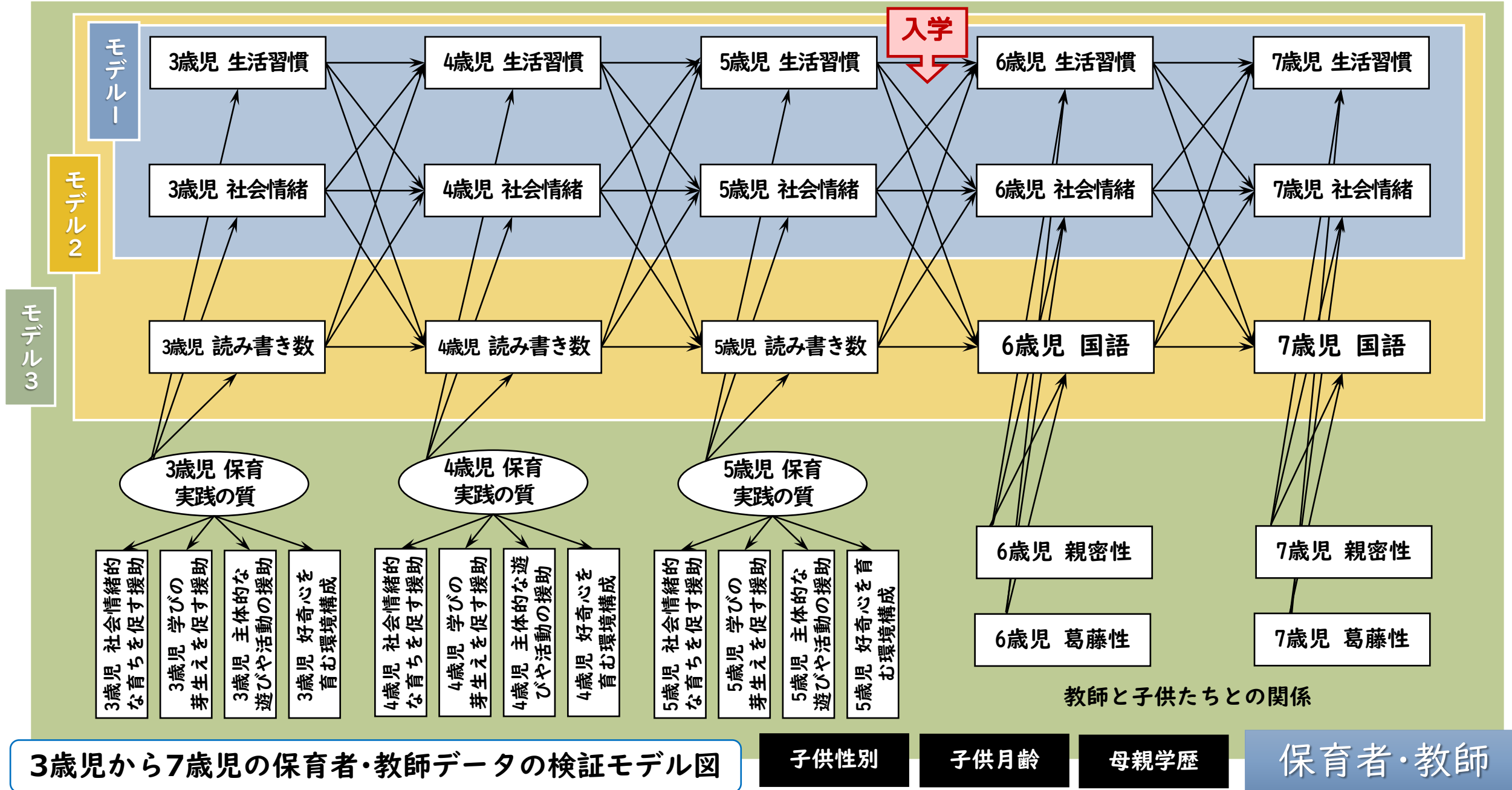
自己主張

- みんなの前で、自分の思いや考えを話したり発表したりすることができる
- 友達と意見が違って、自分の考えを主張することができる 等

自他調整

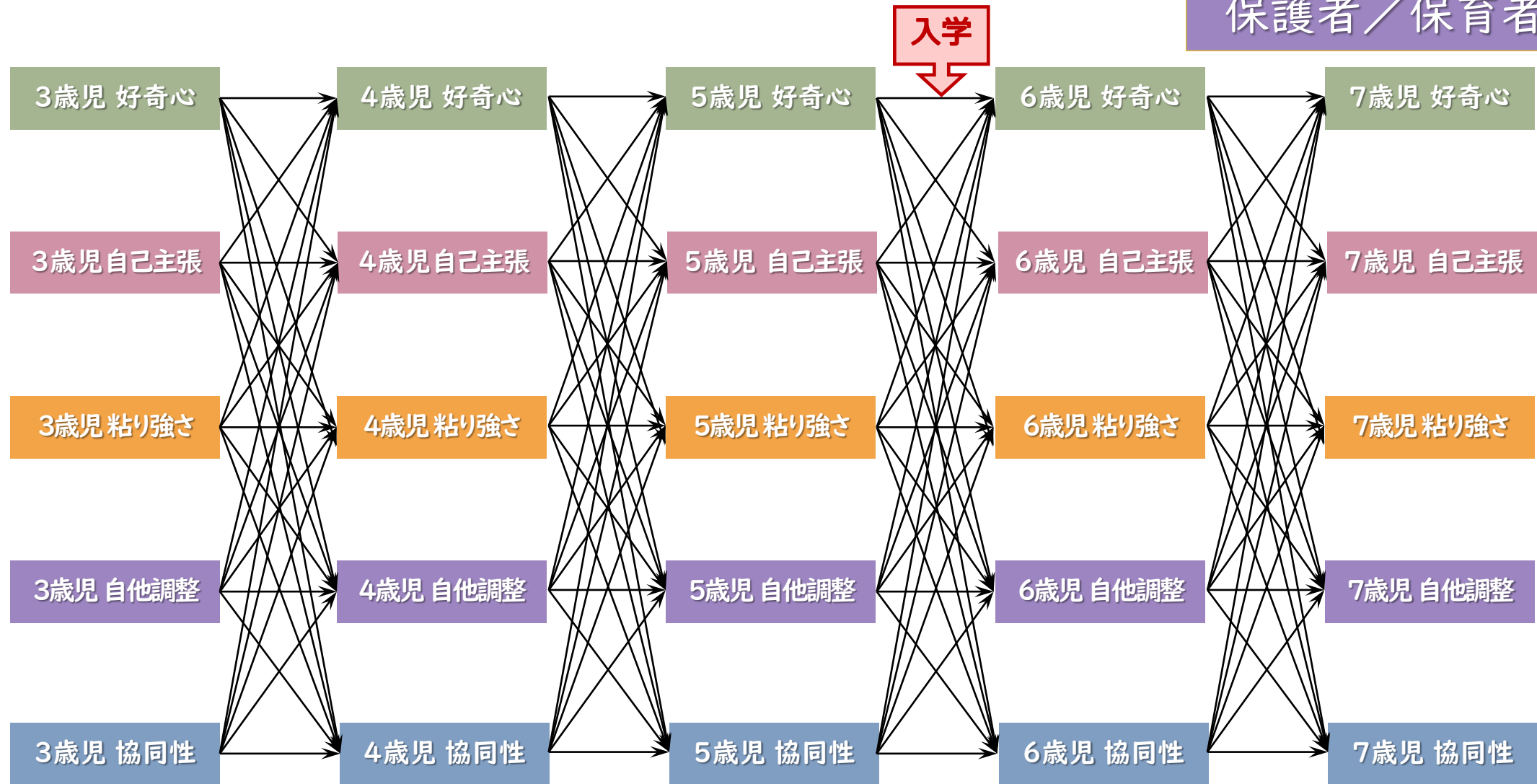
- 何かトラブルが起きたとき、自分のことだけでなく、友達のことも考えて解決しようと努力する
- 友達が困っているときや泣いているとき、なぐさめたり手伝ったりする 等

分析1 生活スキル、社会情緒的スキル、認知的スキルの育ちと保育者・教師との関連



分析2 社会情緒的スキルの育ち：保護者、保育者・教師データの比較

保護者／保育者・教師



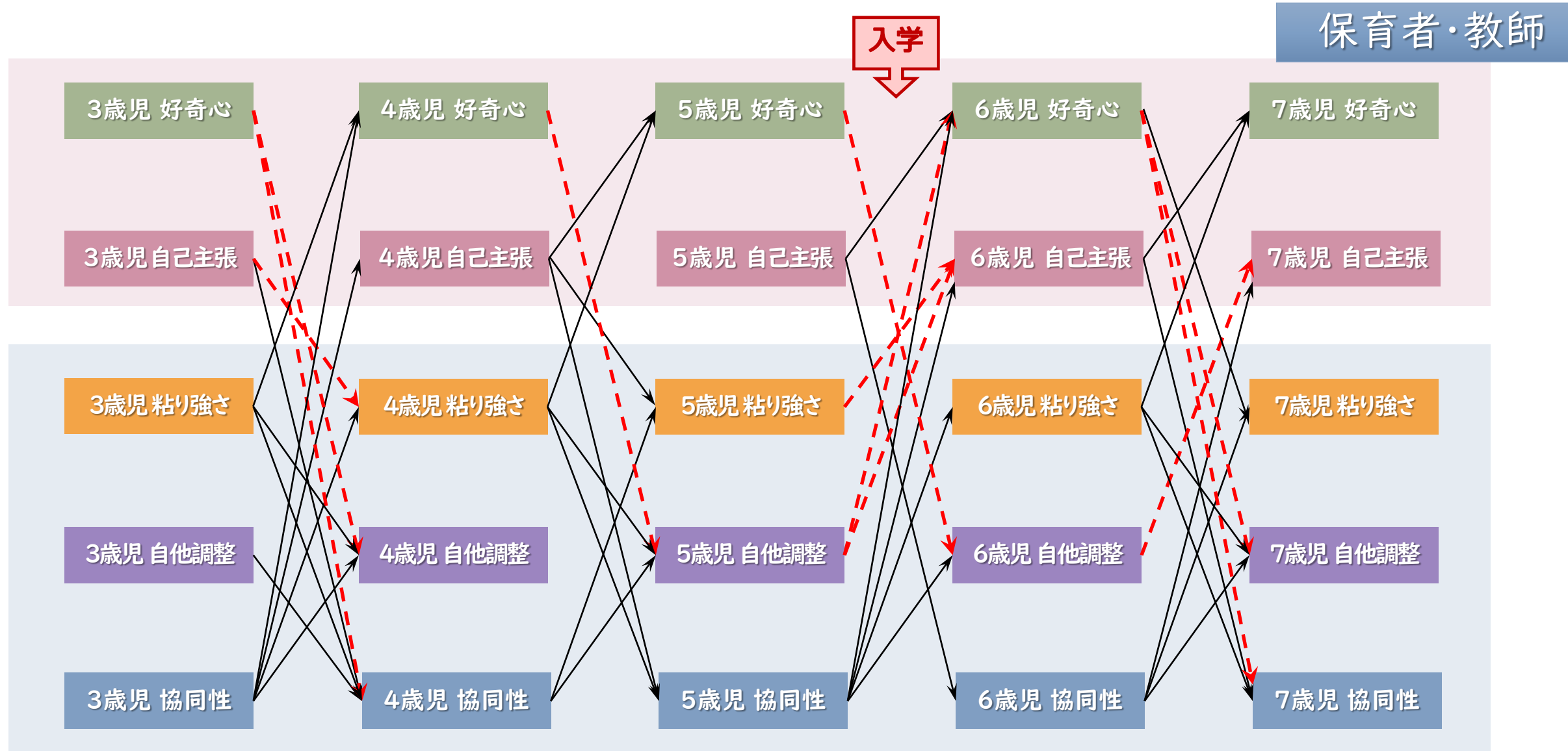
3歳児から7歳児の社会情緒的スキルの検証モデル図

子供性別

子供月齢

母親学歴

分析2 社会情緒的スキルの育ち：保護者、保育者・教師データの比較



社会情緒的スキルの保育者・教師データモデル図

子供性別

子供月齢

母親学歴

※ 実線は+のパス、破線は-のパスを指す。自己回帰パスは省略している。

分析結果のまとめ

- 3歳児から7歳児のどの時期も、生活習慣の形成が子供のスキルの土台となりうる。
- 社会情動的スキルが認知的スキルを支える部分もあれば、認知的スキルが社会情動的スキルの育ちを促す面もある。
- 3歳児から5歳児では、保育実践の質得点が高いほど、生活スキルや社会情動的スキル得点が高い。4歳児では「読み書き・数」スキルも支えている。
- 6歳児と7歳児では、教師と子供たちとの関係において葛藤性が高いほど子供のスキル得点が低く、親密性が高いほど子供のスキル得点が高い傾向。
- 社会情動的スキルの5つの下位尺度ごとに、他の変数との関係に違いがある。
- 社会情動的スキルの育ちにおいて、保護者データと保育者・教師データでは一部逆の影響関係がある。保育者・教師データでは、「好奇心」「自己主張」と、「粘り強さ」「自他調整」「協同性」間に、一部マイナスの影響関係が見られる。

保育者・教師が、特に集団生活の場で、「好奇心」「自己主張」をどう捉えるかが影響している可能性を示唆。

保育者・教師データは別者の回答。保育者と小学校教師の捉えの違い。